

## — コ ラ ム —

## あなたは正しい日本語が使えるか？

——「浸漬」, 「鉍滓」, 「残滓」を例として

ある大学の卒業論文発表会でのこと。学生が「シンシ」「シンシ」を連発した。彼は「浸漬」のことをそう呼んだのであり、説明している図にも「浸漬」と記されていた。一度ならず、再三の発言が耳ざわりに響いたのか、世界的に有名なある先生が「君、それは『シンセキ』と読むんだよ」とやさしく注意された。学生答えるに「先生、日本語の辞書を引いてご確認ください。これは『シンシ』であります。」

大字典（大正6年初版発行、昭和46年9月普及版）によれば、「浸漬：シンシ、だんだんとひたすこと」とある。

多分、大半の読者は「シンセキ」と読む方がはるかに理解しやすいのではなからうか。我々製錬屋のみが「シンセキ」と誤用しているのではあるか。さもなくば、世界一の技術レベルに登りつめた鉄鋼業の驕りが

日本語を変えてしまっているのだろうか。

いまだ無色の中学生と高校生の幾人かに質問したが、やはり、皆「シンセキ」と読んだ。

同様の言葉に

「鉍滓：コウシ、滓(シ)を俗にサイと読めど誤也」

(前出大字典による)

「残滓：ザンシ [「ザンサイ」は慣用よみ]」

(小学館新選国語辞典)とある。

今後、私はどちらを使つたらよいのだろうか。日本人の大半が「シンセキ」、「コウサイ」、「ザンサイ」と認識している中で、正しいからの理由で、我一人「シンシ」……を発する勇気があるだろうか。読者諸兄はいかにや？ 一体、言葉は誰がつくるのだろうか。正しい言葉とはなんなのだろうか。幸いにも論文の査読では漢字の読み方までチェックしないのであるが、査読しつつ、「この著者は一体、何と読んでいるのだろうか」と想像するも、一時の清涼剤である。

((株)神戸製鋼所 材料研究所 稲葉 一)

## — 編集後記 —

特集号「製鉄技術の拡大と高度化」ができて上がりました。前回の製鉄関係特集号が昭和57年に発行されてから5年が経過しております。鉄鋼業の低成長時代から量的には減産をよぎなくされる社会的背景の中で、更にいつその技術の拡大と高度化のため、弛まぬ努力をされておられます会員の皆様方から多数の御投稿をいただきましたことに深く敬意を表します。

本特集号の特徴として、原料関係の基礎的研究、モデル解析における2次元モデルの実用化と3次元化の方向、溶融還元法など高炉以外の製鉄法に関する進歩、ならびに高炉内現象の解析の高度化などが含まれており、現在の我が国における製鉄研究の最先端レベルを示しているといえましょう。今後とも学術技術の向上のため会員諸兄の御健闘をお祈りいたします。

さて、本特集号の編集に当たりまして、担当いただきました編集委員の方々にはたいへん御苦勞をおかけしました。委員の方々に御礼を申し上げますとともに、

御投稿いただきました原稿の著者に一言申し上げたいことがございます。それは、大部分の原稿は非常に立派に仕上げていただいておりますが、中には素晴らしい内容にもかかわらず、文章表現上かなり問題のある原稿が散見されるということです。投稿していただく前にもう一度読み直し、文章を推敲していただき、また、誤字、脱字等ケヤレスミスを少なくしていただきますと、原稿の校閲、査読は非常にスムーズに進み、結果として、編集委員のみならず、著者の負担も少なくなります。これからも多数御投稿いただきたいと存じますので、この点に御注意を払っていただければ幸いです。昨今は、御承知のと通りの財政状況でございますので、本協会も財政負担の軽減に努めております。上記のことは些細なことですが協会の活動に協力していることとなります。御協力のほどお願い申し上げます。(J. Y.)